

教員養成課程における資質能力の育成に関する一考察 —学生の意識調査を中心に—

鈴木 郁子*

A Study on the Development of Teaching Competence and Potential through the Teachers Training Curriculum —Based on the Students' Awareness Survey—

SUZUKI Ikuko

要 約

教育改革に関わる施策の中で、教員の資質能力の向上は重要課題の一つに取り上げられ続けている。本研究では、教員を志望する学生を対象に「教員に求められる資質能力」について、意識調査を行い学ぶ側からの視点を明らかにした。また、学校長が「教員に求める資質能力」と比較したところ、学生は児童生徒に向き合い個を大切にしたい指導を志向するが、学校長は学校現場が抱える課題への指導力を重視する傾向があることがわかり、今後の教員養成スタンダード作成の基礎資料となりうると考えられた。

キーワード：教員の資質能力 教員養成課程 意識調査

1 はじめに

戦後の教員養成制度においては、「大学における教員養成」と「開放制免許状制度」を二大原則として、教員の学問的レベルを中等教育レベルから高等教育レベルに高めることによって専門的能力を有する人材を育てると同時に、実用主義的かつ技術主義的傾向を是正し、自由かつ科学的な精神を持った幅の広い教員養成を目指してきた。

近年、教育現場においては、社会の大きな変動に伴い、学校教育の課題が複雑化・深刻化する様相を呈してきた。それに対応して、教員はさらに高い資質能力を身につけることが社会的に求められ、教育改革に関わる施策が次々と示されてきた。

2005年10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」においては、今日の教員には「社会の変化に対応しつつ、国民の教育に対する期待に応え」、社会からの「揺るぎない信頼を確立」できる質の高い資質能力が求められているとしている、

これを受けて、2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、「教職大学院」制度の創設、教員免許更新制の導入と並んで、教職課程の質的向上が重要課題の一つとして取り上

* 中部大学現代教育学部児童教育学科 中部大学現代教育学研究所

げられ、「教員に対する揺るぎない信頼を確立する」ために、「大学の教職課程を『教員として最小限必要な資質能力』を確実に身につけさせるものに改革すること」として方向性を示している。教員養成・採用・研修について一連の在り方が見直されるなどいくつかの教育改革が提起された。

教育改革に関わる施策の中で、教員の資質向上は重要課題の一つに取り上げられ続けている。2010年度学部入学者からは、実践的指導力の重視と免許状授与に際し教員としての資質力量を一定程度担保しているかを「学習履歴」の管理と合わせて明示的に確認するとして、新たに「教職実践演習」が教員免許を取得する上で必修科目として加えられた。

2 教員に求められる資質能力とは

教職は、かつては「聖職観」として語られ、使命感や献身性、遵法精神が要求されたが、1966年に採択されたユネスコの「教員の地位に関する勧告」では、「教育の仕事は、専門職とみなされるものとする。教育の仕事はきびしい不断の研究を通じて獲得され、かつ維持される専門的知識及び福祉に対する個人及び共同の責任感を要求するものである。」としている。

1987年の教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」では、教員に求められる資質能力を「専門職としての教員の職責に鑑み、教員については、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。」としている。1997年には、同審議会から「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」第一次答申が、翌年の1998年には第二次答申として「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について」を、さらに1999年には第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」を出した。これらの答申で示している教員の資質能力は、(1)いつの時代も教員に求められる資質能力(2)今後特に教員に求められる具体的資質能力の他に(3)得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性を挙げ、以下のように述べている。「すべての教員が一律にこれら多様な資質能力を高度に身につけることを期待しても、それは現実的ではない。今後は、画一的な教員像を求めることは避け、積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切である。」

愛知県での教育施策の動向を見ると、2007年4月に「あいちの教育に関するアクションプラン」を策定し、県民への呼びかけとともに、様々な施策を実施してきたが、しかしながら、解決すべき課題は依然として多く、また、変化の激しい社会において、教育に与えられた使命は一層重要なものとなっている。そこで、今後取り組むべき方向や施策を示す新たな計画として、2011年県教育振興基本計画として「あいちの教育に関するアクションプラン2」を策定した。「自らを高めること」と「社会に役立つこと」を基本的視点とした「あいちの人間像」の実現に向け、「1. 幅広い県民の参加により道徳性・社会性の向上を図ります。2. 発達段階に応じたキャリア教育を充実します。3. 学習意欲の向上を図り確かな学力を育成します。4. 豊かな人生を送るための生涯学習を充実します。」の4点の重点目標を掲げている。

教員は専門家であり、多様な資質能力が求められることに関して、石井英真ら(2013)は「教師の仕事についてその専門性の内実が明確でないのは、その専門性の未熟さというよりは、教育という仕事の包括性や複雑性に由来するものと見るべきで、たとえ、専門教科の学問的内容を熟知しているだけ、あるいは児童生徒の学習や発達の過程を深く理解しているだけでは、教育活動は成立しません。」と述べている。諏訪英広ら(2011)は「問題になるのは、これまで課程認定大学・学部が教員免許法の規定に従ってカリキュラムを設定し、その中で特色ある教員養成や個性ある教員の養成に努めてきたものの、最終的に学生に身につけさせたい最小限必要な資質能力を明示してこなかったことである」とし、小学校長の意識調査から「実践性」が強く求められていることを明らかにしている。渡辺克己(2011)は神奈川県教育委員会が実施した「教育に関する学校関係者向け意識調査」の結果を教員養成の視点から見て、大学としてはわかりやすい授業ができる教員の養成を第一の

目標に定める必要があるが、わかりやすい授業とは、一概に規定することは困難であると指摘している。岩田康之ら（2010）は、教員養成大学側の取り組みにおいて学ぶ側の視点が欠けているとして、「小学校教員の資質・能力形成に関する調査」を学部生と新任教員を対象に実施し、両者共に圧倒的な「実践」志向が見られるとしている。

3 研究の方法

(1) 研究の目的

筆者は、別稿において、学校を管理運営するとともに教員を指導する立場にある学校長を対象に、「特に教員に求めるべき資質能力」についての意識調査を行ったが、今回は、教職課程の受講学生を対象にして、学ぶ側から見た「教員に求められる資質能力」についての意識を明らかにし、両者の結果を比較検討することとした。そこから得られた知見を今後の教員養成にいかすことをねらいとして本研究を計画した。

(2) 調査の概要

本研究は、A 大学において 2007 年度・2008 年度教職課程の科目の一つである「障害児の教育」を受講した学生（38 人、74 人）と、B 大学において、2009 年度、2010 年度、2012 年度に「教職論」を受講した学生（71 人、84 人、94 人、全員 2 年生）及び、2013 年に「教職入門」を受講した学生（94 人、全員 1 年生）を対象に質問紙調査を実施した。

質問紙調査は、最初の講義時に趣旨を説明して記名式で回答を求めたが、個人が特定されないデータとして処理を行った。なお、2013 年については、講義終了時に、同じ質問紙調査を行い、個々の意識の変化についても調査した。

(3) 調査項目

質問紙の内容は、教育職員養成審議会答申、初任者研修や教職経験者研修等が目的とする教員の資質能力について精査して筆者らが作成した 2004 年度の質問紙から、「資質能力」「学習指導」「生徒指導」「校務分掌」の四つの柱を抜粋して作成した。

回答は、4 項目についてそれぞれ 6 ないし 7 の選択肢を設け、「最も必要と考える」「次に必要と考える」の回答を求めた。

(4) 質問紙

質問紙は以下の通りである

1 下記の項目の中から、教員として最も必要と思われる資質能力を 2 点選んでください。

- a 豊かな専門的知識と技能を備えている。
- b 児童生徒に愛情を持ち、教育に情熱と使命感を持っている。
- c 広い教養を持ち、円満で調和がとれている。
- d 実行力に富み、活力・体力がある。
- e 明るく、心身ともに健康である。
- f 穏健、中正な良識がある。

2 下記の各分野別の項目の中から教員として最も必要と思われる資質能力を 2 点選んでください。

* 学習指導

- a 授業に活力があり、楽しく、わかりやすい。
- b 専門的知識が高く、話題が豊富である。

- c 教材研究や授業の準備が周到である。
- d 説明や板書の内容がよく整理されている。
- e 提出物などをきちんと出させる。
- f 授業の始まりと終わりの時間をきちんと守る。
- g 授業中の私語を注意するなど、授業規律を大切にする。

＊生徒指導

- a 機に応じた指導ができ、問題を適切に処理する。
- b 叱り方が上手で、心に響く指導をする。
- c 児童生徒に公平に接することができ、分け隔てがない。
- d 学校のきまりなどを、自分の言葉で正しく理解させる。
- e 児童生徒の名前をしっかりと覚え、一人一人をよく把握する。
- f 児童生徒自らが考え、行動できる力を身につけさせる。

＊校務分掌

- a てきぱきと事務処理ができ、かつ正確である。
- b 情報を収集し、分析・活用する能力がある。
- c よく創意工夫し、アイデアを校務にいかす。
- d 自ら進んで仕事をし、労を惜しまない。
- e 周りの意見をよく聞くとともに、自分の意見をはっきり述べることができる。
- f 周囲と協調して仕事をする。
- g 報告・連絡・相談ができる。

(5) 回答者の基本属性

表1 回答者（451人）の基本属性

学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	
	97人（22%）	310人（68%）	34人（ 8 %）	10人（ 2 %）	
大学	A大学	B大学			
	109人（24%）	342人（76%）			
年度	2007	2008	2009	2011	2013
	37人（ 8 %）	143人(32%)	83人（18%）	94人（21%）	94人（21%）

回答者（454人）の基本属性は表1の通りである。

(6) 集計の方法

選択肢ごとに「最も必要」「次に必要」の回答者数を集計し、「最も必要」には2点、「次に必要」には1点を与えて合計点を出した。合計点の割合を円グラフで表示した。

4 調査結果

集計の結果は、表と図で示すが、以下図や表中の a、b、c、d、e、f、g は、前掲 3(4)で示した質問紙の項目ごとの選択肢に対応する。

(1) 資質能力

集計の結果は、表 2、図 1 の通りである。

表 2

	資質能力					
	a	b	c	d	e	f
合計点	146	673	221	85	164	59
最も必要 (人)	30	309	48	11	42	9
次に必要 (人)	86	55	125	63	80	41

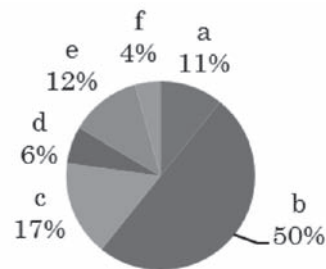


図 1 資質能力（全体）

b「児童生徒に愛情を持ち、教育に情熱と使命感を持っている」50%、次いでc「広い教養を持ち、円満で調和がとれている」17%、続いてe「明るく、心身ともに健康である」(12%)、a「豊かな専門知識と技能を備えている」(11%)を選択している。反対にf「穏健、中正な良識がある」は4%と低い。

(2) 学習指導

集計の結果は、表 3、図 2 の通りである。

表 3

	学習指導						
	a	b	c	d	e	f	g
合計点	712	215	117	130	23	96	57
最も必要 (人)	323	53	26	18	5	20	5
次に必要 (人)	66	109	65	94	13	56	47

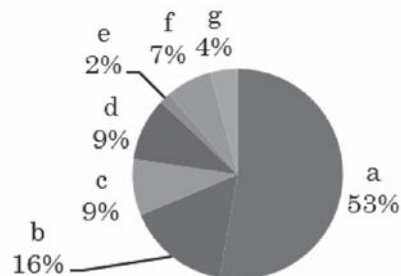


図 2 学習指導（全体）

a「授業に活力があり、楽しく、わかりやすい」(53%)が一番高く次いで、b「専門的知識が高く、話題が豊富である」(16%)と続いている。反対にf「授業の始まりと終わりの時間をきちんと守る」(2%)、やg「授業中の私語を注意するなど、授業規律を大切にする」(4%)は低い。

(3) 生徒指導

集計の結果は、表4、図3の通りである。

表4

	生徒指導					
	a	b	c	d	e	f
合計点	211	215	338	30	316	238
最も必要(人)	65	76	126	9	113	60
次に必要(人)	81	63	86	12	90	118

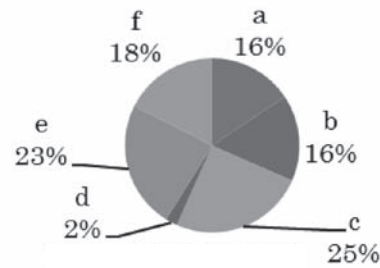


図3 生徒指導（全体）

この設問では、c「児童生徒に公平に接することができ、分け隔てがない」(25%)、e「児童生徒の名前しっかり覚え、一人一人をよく把握する」(23%)が拮抗して多く選択されている。それに続いてf「児童生徒自らが考え、行動できる力を身につけさせる」(18%)、小差でa「機に応じた指導ができ、問題を適切に処理する」(16%)、b「叱り方が上手で、心に響く指導をする」(16%)が選ばれている。学生の選択は、d「学校のきまりなどを、自分の言葉で正しく理解させる」(2%)の選択肢を除いて、多岐の選択肢に分散している。

(4) 校務分掌

集計の結果は、表5、図4の通りである。

表5

	校務分掌						
	a	b	c	d	e	f	g
合計点	146	105	122	197	341	219	213
最も必要(人)	53	26	36	77	117	66	72
次に必要(人)	40	53	50	43	107	87	69

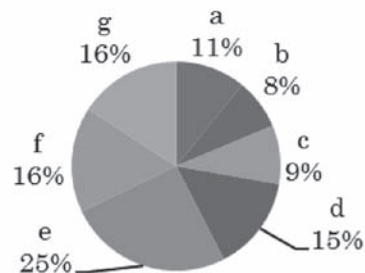


図4 校務分掌（全体）

e「周りの意見をよく聞くとともに、自分の意見をはっきり述べることができる」(25%)が一番多い。f「周囲と協調して仕事をする」(16%)、g「報告・連絡・相談がしっかりできる」(16%)、d「自ら進んで仕事をし、労を惜しまない」(15%)が次に続くが得点は近似している。さらにa「てきぱきと事務処理ができ、かつ正確である」(11%)、c「よく創意工夫し、アイデアを校務にいかす」(9%)、b「情報を収集し、分析・活用する能力がある」(8%)の順となった。

5 考察

(1) A大学とB大学の比較

A大学での調査対象学生は、全学の教員免許状取得希望者で構成されていて、1年生から4年生までの109人であり、その内訳は1年生3人、2年生62人、3年生34人、4年生10人である。この中で4年生は介護等体験を済ませ、これから教育実習に出かけるところであるが、全員教育実習は未経験である。B大学での調査対象学生は、全員児童教育学科で、1年生97人、2年生248人の合計345人であり、介護等体験、教育実習共に行っていない。従って、A・B大学共に教育現場での実習は未経験な学生の意識調査であるところから、両者の得点を比較検討することとした。

図5、図6の通り資質能力に関してA大学の方がB大学より高い割合を示した事項はc「広い教養を持ち、

表6 A大学とB大学の各項目の比較

		：資質能力						学習指導						
		a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	g
A大学	合計点	36	148	63	20	35	25	156	72	27	28	7	19	18
	最も必要（人）	8	67	13	4	10	7	65	22	8	5	2	5	2
	次に必要（人）	20	14	37	12	15	11	26	28	11	18	3	9	14
B大学	合計	110	525	158	65	129	34	556	143	90	102	16	77	39
	最も必要（人）	22	242	35	7	32	2	258	31	18	13	3	15	3
	次に必要（人）	66	41	88	51	65	30	40	81	54	76	10	47	33

		：生徒指導						校務分掌						
		a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	g
A大学	合計点	66	50	70	11	49	81	27	41	36	34	100	43	46
	最も必要（人）	20	18	27	4	17	23	8	12	11	13	35	14	16
	次に必要（人）	26	14	16	3	15	35	11	17	14	8	30	15	14
B大学	合計	145	165	268	19	267	157	119	64	86	163	241	176	167
	最も必要（人）	45	58	99	5	96	37	45	14	25	64	82	52	56
	次に必要（人）	55	49	70	9	75	83	29	36	36	35	77	72	55

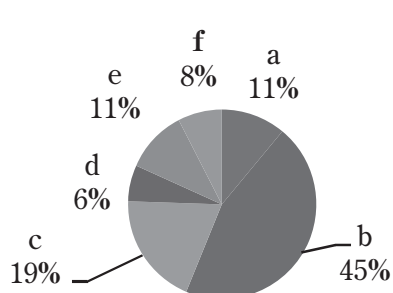


図5 資質能力 (A大学)

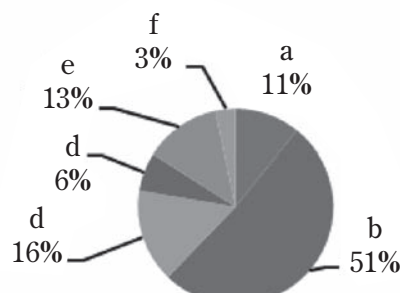


図6 資質能力 (B大学)

円満で調和がとれている」とf「穏健、中正な良識がある」であり、B大学は、b「児童生徒に愛情を持ち、教育に情熱と使命感を持っている」、e「明るく、心身ともに健康である」であったが、選択順位については、ほぼ同じ傾向であった。

図7、図8の通り学習指導については、A大学、B大学共に選択順位は同傾向であったが、B大学は、a「授業に活力があり、楽しく、わかりやすい」を選択した学生の割合が高かった。

図9、図10の通り生徒指導については、A大学はf「児童生徒自らが考え、行動できる力を身につけさせる」が最も多いのに対して、B大学ではc「児童生徒に公平に接することができ、分け隔てがない」e「児童生徒の名前をしっかりと覚え、一人一人をよく把握する」の2項目であった。両大学の選択傾向に差が見られるのは、取得免許状がA大学は、中高免であるのに対し、B大学は小免であるところに起因するものと考えられる。

図11、図12の通り校務分掌では、e「周りの意見をよく聞くとともに、自分の意見をはっきり述べることができる」が両大学共に一番多く選択されてはいるものの割合は31%と24%とやや開きがあり、またそれ以外の選択肢もかなり分散的に選ばれている。教員としての実務体験のない学生にとっては、校務分掌はこれまでの経験知の中で全体像を描きにくい職務内容とも考えられる。

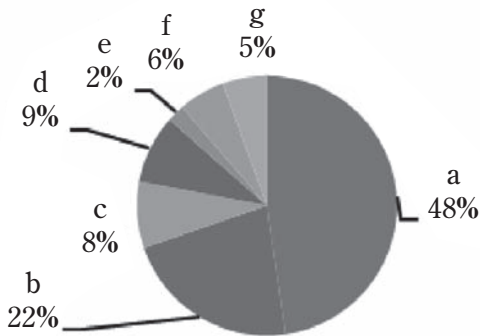


図7 学習指導 (A 大学)

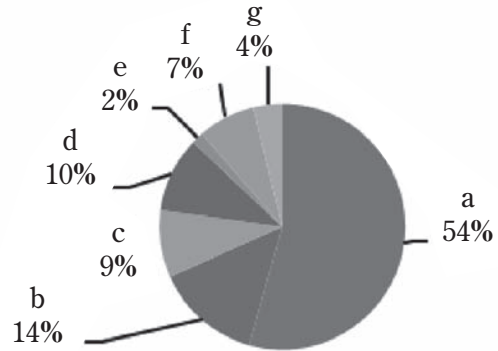


図8 学習指導 (B 大学)

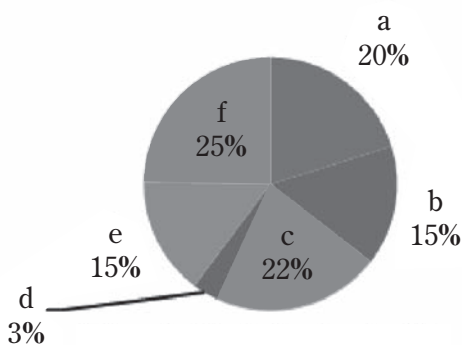


図9 生徒指導 (A 大学)

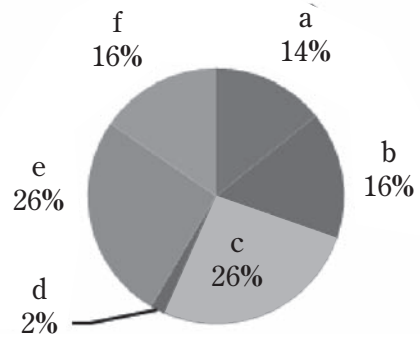


図10 生徒指導 (B 大学)

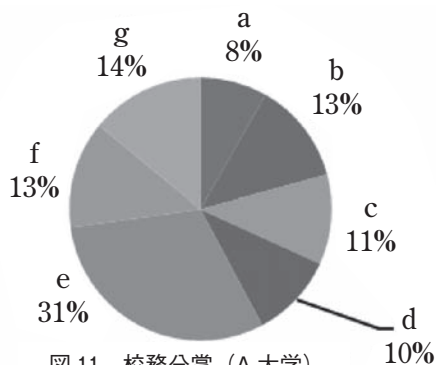


図11 校務分掌 (A 大学)

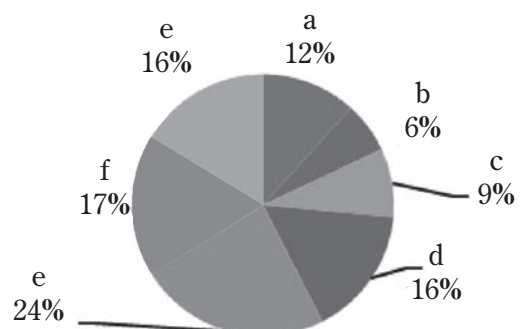


図12 校務分掌 (B 大学)

(2) 校長会での調査との比較

筆者が先に行った学校長対象の調査結果(2008)と今回の学生を対象とした調査結果とを比較検討した。(学校長の結果は、中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 1 に掲載)

資質能力については、両者共に高い割合でb「児童生徒に愛情を持ち、教育に情熱と使命感を持っている」が選択され一致したが、学校長が次に必要としてあげたd「実行力に富み、活力・体力がある」は、学生の選択では5番目(6%)であった。

学習指導では、a「授業に活力があり、楽しく、わかりやすい」が両者とも一致したが、学校長が次に必要とした事項はg「授業中の私語を注意するなど授業規律を大切にしている」であったのに対し、学生は6番目(4%)と低かった。

また、生徒指導では、学校長がa「機に応じた指導ができ、問題を適切に処理する」を第一に挙げているのに対し、学生の選択では第5位(16%)に留まっている。この他にも選択順位にいくつかの差異があった。全体的に見て、学生はじっくり児童生徒と向き合って関わろうと考える傾向が見られるのに対し、校長は、学校現

場の抱える生活指導上の諸問題に迅速かつ適切に対応する教師力を求めていることが読み取れる。

校務分掌では、両者の選択順位にかなり差異がみられる。学校長はd「自ら進んで仕事をし、労を惜しまない」次にa「てきぱきと事務処理ができ、かつ正確である」を上げているが、学生の選択では、第4位、第5位と高くない。学生は、周りの意見をよく聞き周囲と協調する姿勢を大切としているのに対して、学校長は、各自の職務を主体的に迅速かつ正確に遂行する能力を求めていることが伺える。

(3) 受講前後の比較

2013年度の1年生については講義開始時と最終講義時に同じ質問紙を用いて意識調査を実施した。その結果を図13. 14. 15. 16. で示す。

受講前後の集計から項目ごとに選択数を比較すると、資質能力、学習指導、生徒指導、校務分掌共に、選択傾向には大きな変化は見られず、受講後は、選択数が全体的に散らばりを見せているが、その中でも、選択数の変化が大きいものを上げると、資質能力ではd「実行力に富み、活力・体力がある」(6人増)、学習指導ではc「教材研究や授業の準備が周到である」(15人増) f「授業の始まりと終わりの時間をきちんと守る」(6人減) g「授業中の私語を注意するなど、授業規律を大切にする」(6人減)、生徒指導ではf「生徒自らが考え、行動できる力を身につけさせる」(7人増) 校務分掌では、g「報告・連絡・相談がしっかりできる」(11人増)「周囲と協調して仕事をする」(6人減)であった。なお、受講前後での意識の変化は、94人中68人(72%)が有と答えている。

次に変化の要因を聞いたところ、図17の結果を得た。

変化の要因の第一は、講義の受講に関わるもので73%を占めた。次いで、「社会問題、教育問題等のニュースを始めとする情報を得ての変化」9%、「ボランティア活動等の体験を通しての変化」7%、「家族や友人、部活動等の人間関係からの情報を得ての変化」6%と続くが、「教育関係の専門書を始めとする書籍からの情報を得ての変化」は3%とごく少数である。その他は「心境」「気分」による変化であった。入学当初は、生徒側の目線で教師の仕事を見ていたのが、講義を受けたり、教師の仕事や教育問題に関心を向ける環境で生活したりする中で、これまでの視点とは違う視点を感じ取ってきた表れと考えられる。ただし、学生それぞれの意見が多様になってきていることが伺えるが、クラブや部活動、あるいは学外でのアルバイトなどの体験を通じて、高校時代とは違い自己責任が問われる一歩大人に近づいた立ち位置を経験した中での変化ではないかと考え

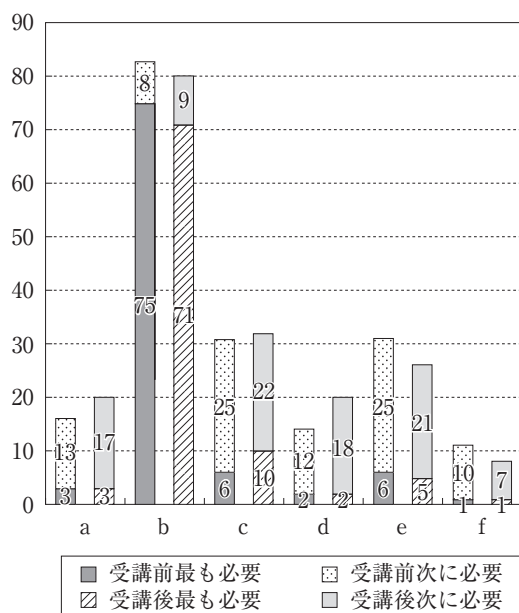


図13 資質能力

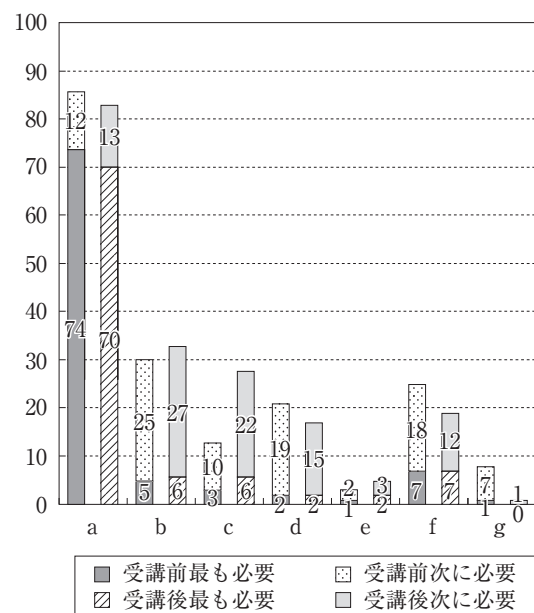


図14 学習指導

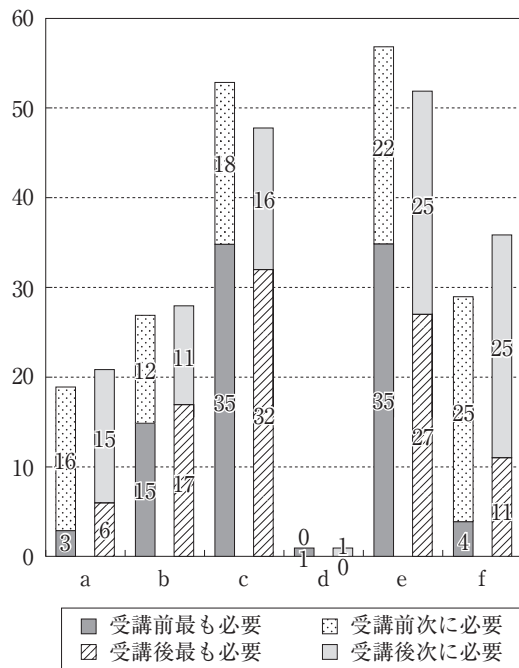


図 15 生徒指導

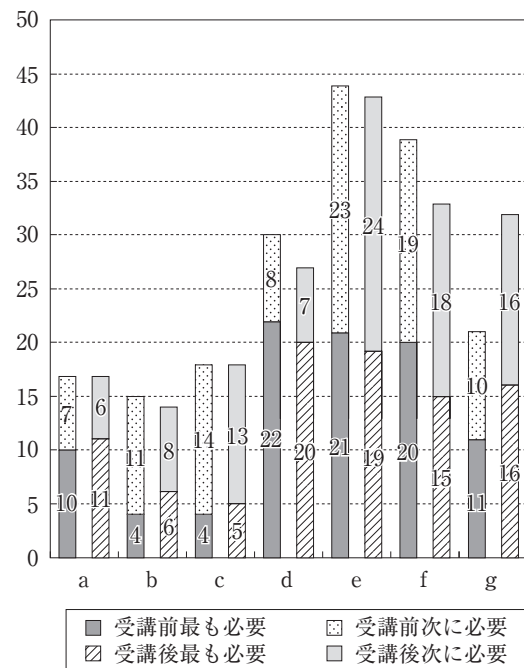


図 16 校務分掌

る。

6 まとめと今後の課題

教職課程で学ぶ学生を対象とした資質能力に対する意識調査結果では、大学間の差異より、学校長が必要と考える教員の資質能力との比較において、必ずしも一致するものばかりではなかった点に着目した。学校長は、今日の教育現場が抱える諸課題の困難性にきちんと向き合い、児童生徒や保護者の思いや願いに応える高い指導力と社会からの要請にも対峙できる資質を求めていることに対して、学生は、児童生徒一人一人に向き合う姿勢と個を大切にした指導を重視する傾向が読み取れる。

2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では「これからの社会と教員に求められる資質能力」について、「社会の大きな変動に対応し、国民の学校教育に対する期待に応えるた

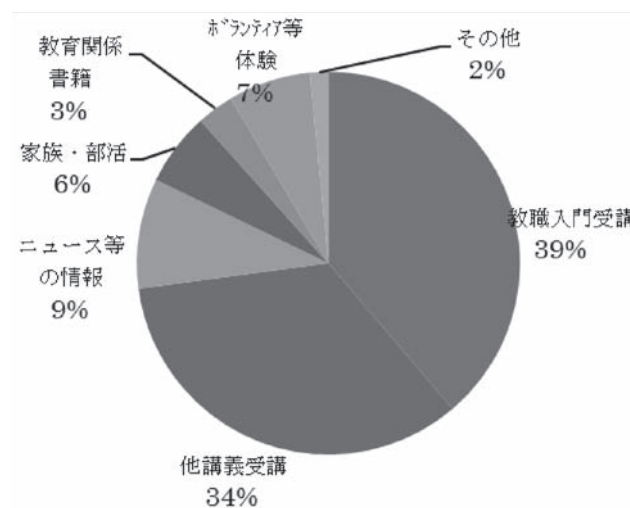


図 17 変化要因

めには、教員に対する揺るぎない信頼を確立し、国際的にも教員の資質能力がより一層高いものとなるようにすることが極めて重要である。」と提言していることから、現実には多様な資質能力を身につけることが養成段階で求められている。別惣淳二ら（2011）は、小学校教員養成スタンダードの作成を通して、自立的に生涯にわたって「学び続ける教師」であり続ける能力を養成段階で身につけることが求められるとしている。長谷川哲也（2013）は、教員に必要とされる資質能力に基づくスタンダードの予備的考察の中で、「教員をめぐる近年の改革は、養成・採用・研修という教師教育の各段階において、教員の資質能力をいかに向上させるかということに焦点づけられている。そのため大学での教員養成課程には、単位さえ揃えば自動的に教員免許状が取得できるという「履修主義」ではなく、教員としてふさわしい資質能力が育ったか否かが問われる「習得主義」への転換が、あるいは実際に「教室で何ができるか」を示すことが求められている。」と述べている。これらの意見等と重ね合わせると、教員養成課程においては、本研究に表れた学生の意識を受け止めつつ継続的に学修を進める態度の育成を通して、「常に学び続ける自立的な姿勢」の醸成と、4年修了時には、学校現場が求める教員としての力量に近づけること、言い換えれば「日常の授業や生徒指導、学級経営さらには担当する校務分掌が大きな支障もなく進められる実践的な力量」をいかに担保していくかということに帰着するものと考えらる。

本研究では、妥当性の検証や「教員養成課程で育成すべき資質能力」の構造を明らかにするところまでの検討にいたれなかった。さらには、教員養成スタンダードの開発が今後の課題として残されている。これらの点については、今後の研究に継続していきたい。

7 おわりに

以上、学生の意識調査を通じて、教員養成課程における資質能力を見てきた。大学間あるいは校長会で得た結果との差異が見られることは予想されたが、大学間より、学校現場で期待される教員の資質能力と学生の意識との間の差異がいくつか明らかとなり、今後につながる基礎資料となりうられると思われる。その意味においても、学部段階において「最小限必要な資質能力」を身につけさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するとして2006年中教審答申で提言され設置された「教職実践演習」の科目との関連性を重視した学生支援の必要性がより明らかとなった。

参考文献・資料

1. 中央教育審議会答申 2002・2005・2006 各報告・答申年度版
2. 教育職員養成審議会 1987・1997・1998・1999 各報告・答申年度版
3. ユネスコ特別政府間会議「教員の地位に関する勧告」1996 出典：「教育条約集」（永井憲一監修・国際教育法研究会編）三省堂
4. 愛知県教育委員会「あいちの教育に関するアクションプラン」<http://www.pref.aichi.jp/0000000650.html>
5. 愛知県教育委員会「あいちの教育に関するアクションプラン2」<http://www.pref.aichi.jp/0000043054.html>
6. 愛知県教育委員会「平成26年度愛知県公立学校教員採用選考試験について」<http://www.pref.aichi.jp/0000022073.html>
7. 石井英真他（2013）「教職実践演習」ミネルヴァ書房 6-7
8. 諏訪英広他（2011）「小学校教員の資質能力の形成と養成カリキュラムに関する研究—小学校長の意識調査を中心に—」川崎医療福祉学会誌 Vol. 21 No. 1 65-75
9. 渡辺克己（2011）「教員養成の充実に関する一考察—期待される教師の育成を目指して—」北里大学一般教養紀要 16 127-136
10. 鈴木郁子（2008）「特別支援教育を支える教員像に関する一考察—学校現場からの資料をもとにして—」中部大学現代教育学研究紀要 第一号 89-98
11. 岩田康之他（2010）「小学校教員養成のカリキュラム評価に関する考察—学部生と教員初任者の意識調査を中心に—」東京

学芸大学紀要総合教育学科系Ⅱ 61: 197-208

12. 別惣淳二他（2011）「小学校教員養成スタンダードに関する開発的研究—大学卒業時における「教員としての最小限必要な資質能力」の同定と構造化—」兵庫教育大学研究紀要 36 25-35
13. 長谷川哲也（2013）「教員に必要とされる資質能力に基づくスタンダードの予備的考察—各種審議会の議論や選考事例の検討を通じて—」静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 No. 21 121-130

受付日 2013 年 9 月 30 日

受理日 2013 年 10 月 28 日